http://alce.jp/journal/ 第 16 巻（2018）pp. 279-300 ISSN：2188-9600

Studies of Language and Cultural Education SLCE 言語文化教育研究 発行・編集 言語文化教育研究学会 ALCE Association for Language and Cultural Education

フォーラム

【講演記録】

竹田青嗣『欲望論』をめぐる講演とパネルディスカッション

言語ゲームと暴力原理 ―― 『欲望論』の展望

講演
竹田　青嗣
（早稲田大学 *）

パネリスト
細川　英雄
（言語文化教育研究所八ヶ岳アカデメイア，
早稲田大学）

パネリスト
西口　光一
（大阪大学国際教育交流センター
／大学院言語文化研究科）

企画・取りまとめ：稲垣　みどり（早稲田大学 #）

概要

本稿は 2018 年 1 月 30 日（火）に当学会の特別企画として開催された竹田青嗣氏の主著『欲望論』をめぐる本人による講演とパネルディスカッションの記録である。特別企画の前半は，竹田氏が「言語の本質とは何か」という問題から出発する言語ゲーム論を中心に，言語を用いて共通了解を生み出していくための原理としての『欲望論』の哲学原理について講演した。後半はそれを承け，細川英雄氏と西口光一氏が，『欲望論』を日本語教育の分野におけるそれぞれの問題意識に引き寄せつつ講演し，その後，竹田，細川，西口各氏によるパネルディスカッションを行った。その後，フロアとの質疑応答という形でオープンに議論が展開した。どのような社会を構想するべきなのか。それにはどのような哲学原理が必要なのか。そして，ことばの教育に携わる者は，そのような社会の構想に向けてどのような問題意識を持ち，どのように行動すべきなのか。方法論に先立つ「意味」と「価値」を問う「ことばの教育」の哲学原理について，会場では活発な議論が交わされた。本稿では，紙数の関係から竹田，細川，西口各氏の講演部分は要旨のまとめ，他の部分は談話体による記述とした。本稿によって当日の講演およびパネルディスカッションの内容が，臨場感を持って読者に伝われば幸いである。

Copyright © 2018 by Association for Language and Cultural Education

キーワード　現象学，本質観取，実践研究，イデオロギー的存在，言語教育，市民性

* 当時。現，大学院大学至善館。

当時。現，東京国際大学。

1. 企画主旨と講演者プロフィール

1. 1. 企画者による企画主旨

本企画「竹田青嗣『欲望論』をめぐる講演とパネルディスカッション：言語ゲームと暴力原理―『欲望論』の展望」は，2018 年 1 月 30 日（火）に言語文化教育研究学会の特別企画として早稲田大学で開催された。日本語教育学を専門分野とする企画者の稲垣（言語文化教育研究学会企画委員，以下筆者）が，竹田青嗣氏に師事して哲学および現象学を学ぶうち，言語教育の意味と価値を問う当学会の理念に，竹田氏の現象学を基盤とした欲望論の哲学原理は非常に密接に関わると感じたことが，本企画を立ち上げた動機である。竹田氏が『欲望論』（竹田, 2017a, 2017b）で展開している哲学は，日本語教育における以下の二つの課題におおいに示唆を与え得ると考える。一つ目は，いかに信念対立を乗り越えて共通了解を成立させ，多文化共生を実現するかという課題。二つ目は，市民性・公共性を目指す日本語教育の「価値」の創出をいかになすべきかという課題である。筆者は 2017 年 2 月にも竹田氏を招いて当学会で「言語ゲームと人間」のタイトルで特別企画を開催した。細川氏と西口氏も来場し，エキサイティングな議論が展開した。3 氏の熱い議論を共有するため，再び本企画を立ち上げ，その講演録である本稿をまとめる。竹田氏は 2017 年 10 月に主著の『欲望論』を 2 巻刊行し，2018 年 3 月に早稲田大学を定年退職した。本企画の流れは，1）竹田氏講演（70 分）2）西口氏講演（20 分）3）細川氏講演（20 分）4）竹田×西口×細川各氏によるパネルディスカッション（30 分）5）フロアとの質疑応答（30 分）である。本稿は紙数の関係から，1）から 3）までをそれぞれの講演者の要旨をまとめる形で掲載する。また 4）と 5）は，やりとりの様子がわかるよう，談話形式で記載する。

1. 2. 講演者プロフィール

竹田青嗣 —— 早稲田大学名誉教授。大学院大学至善館教授。2018 年 3 月に早稲田大学国際教養学部教授を退職する。1947 年大阪生まれ。在日韓国人二世。早稲田大学政治経済学部卒業。哲学者・文芸評論家。在日作家論から出発。文芸評論，思想評論とともに，実存論的な人間論を中心として哲学活動を続ける。プラトン，ニーチェ，フッサール現象学を基礎として，哲学的思考の原理論としての欲望論哲学の集大成として『欲望論』（2017 年 10 月）を刊行。主な著作：『自分を知るための哲学入門』『ニーチェ入門』（ちくま新書），『現象学入門』（NHK ブックス），『言語的思考へ』『近代哲学再考』（径書房），『人間的自由の条件』（講談社学術文庫），他多数。

パネリスト：細川英雄 —— 言語文化教育研究所八ヶ岳アカデメイア主宰。言語文化教育研究学会代表理事。早稲田大学名誉教授。主な著書に『日本語教育は何をめざすか —— 言語文化活動の理論と実践』（2002, 明石書店），『「ことばの市民」になる —— 言語文化教育学の思想と実践』（2012, ココ出版）がある。

パネリスト：西口光一 —— 大阪大学国際教育交流センター／大学院言語文化研究科教授。主な著書に『第二言語教育におけるバフチン的視点 —— 第二言語教育学の基盤として』（2013, くろしお出版），『対話原理と第二言語の習得と教育 —— 第二言語教育におけるバフチン的アプローチ』（2015, くろしお出版）がある。

2. 竹田青嗣講演「言語ゲームと暴力原理 —— 欲望論の展望」講演要旨

今日の講演のコンテンツは，1）言語ゲームと暴力原理，2）言語ゲームと現象学，3）言語ゲームと価値審級形成の 3 つである。人間社会では「言語ゲーム」を通して初めて，人間独自の善悪，美醜，真偽という価値の審級が形成される。これが『欲望論』

で展開された価値原理論だが，この内実を上の三点に沿って説明していく。

2．1「言語ゲームと暴力原理」

マルクス主義は階級闘争史観を立てたが，私としては普遍闘争史観を歴史のより根本的な中心概念として立てたい。3人の思想家がその背後にいる。1人は宗教学者，歴史学者のミルチャ・エリアーデ。彼は『世界宗教史』の中で，生きるために殺すことを選んだこと，あるいは殺す - 殺されるということへの自覚的意識こそ，人間が人間になる上での大きな契機となったと述べている。2人目はジョルジョ・バタイユ。バタイユは『エロティシズム』で，ラスコーの壁画は殺害と贖罪の宗教的意識の表現ではないか，という独自の説を出した。3人目はトマス・ホッブス。ホッブスは『リヴァイアサン』で，「万人の万人に対する戦争」という概念を出し，競争と不信と自負という3つのことが戦争の原理であると述べた。私はとくに「不信」を最も本質的であると考え，これを「不安競合」と名付けた。ホッブスによると，「不安・競合・不信」が戦争の原理である以上，これを抑制する原理として，強力な統治権力，強力なルール，そしてペナルティのシステムをあげた。人間社会では戦争は普遍的だが，これに抗する上でホッブスの原理以上の優れた考えはまだ現われていない。

2．1．1．普遍闘争史観

人類は1万年前から農耕定住を始めた。5500年前に文明が発生したといわれる。文明が生じたということは，そこに大きな権力が現われたということ。つまり，文明が発生するまでの間，すでに普遍闘争が起こっていた。巨大権力，古代の大帝国の類型はその歴史的所産である。ここでは，王や皇帝と呼ばれるものがすべてを所有し，万人を支配した。大多数の人間が絶対権力に隷属して生きるという状態が5500年前から200年ぐらい前まで続いてきた。人間の社会は，少数の例外を除いて，普遍戦争とその帰結としての絶対支配体制を繰り返していた。近代社会は，この一万年続いてきた普遍闘争と絶対支配体制に代わる，まったく新しい社会体制の可能性として，哲学的には捉えねばならない。

人間は，歴史を通して普遍闘争を抑制するための様々な工夫をしてきた。相互贈与，相互交換，交易，婚姻，そして宗旨統合である。しかしどれも普遍闘争を抑止する決定的決め手とならなかった。普遍闘争が最後の勝利者を選び出し，その結果現われる大帝国だけが普遍戦争を終焉させることができた。

そもそも共同体間の戦争は食料の備蓄が始まると同時に生じた。一旦戦争が始まると平和な共同体も潜在的に戦争共同体とならざるをえない。中国の例のように，強国が現われて戦いあい，大きな帝国となって絶対支配体制をしく。しかし大帝国の支配体制もやがて解体し再び闘争状態が現われ，また新たな帝国が成立する。中国では3000年これを繰り返していた。世界中でこのような事態があり，古代から覇権闘争時代があり，やがて大帝国の時代が類型的に現われる。ここでは，たいてい支配階層が15％に対して被支配階層が85％という構成があり，従属する人民はつねにギリギリの生存状況を強いられた。ヨーロッパ近代のはじめに，はじめて知識人や哲学者たちは，万人が自由な存在となりうる社会の可能性に触れた。つまり人類が普遍闘争と絶対支配のサイクルから抜け出して，新しい社会へと進みうる可能性を，哲学として構想した。その出発点がホッブズであり，その意味で，彼が戦争の原理とその抑制の原理を提示したことの画期的な意味は，測りしれない。

2．2．「言語ゲーム」と現象学

2．2．1．言語ゲーム　デカルト（1596 ～ 1650）

「言語ゲーム」はヴィトゲンシュタインの概念として知られている。現代哲学，英米系の分析哲学では，言語の意味の謎が非常に重要なテーマであり，

言語哲学の中心問題だった。現代言語学は，フレーゲ，ラッセル以来，論理学の数学化の試みをその出発点とする。18 世紀以降，ヨーロッパ近代哲学は，ドイツ観念論がその主流をなした。中心人物はカントとヘーゲル。彼らの哲学は非常に難解かつ，抽象的であり，19 世紀の半ばから実証主義科学が現われてヨーロッパ哲学を批判する。伝統哲学は答えのない問いを問い続ける形而上学である，というのである。19 世紀後半以後現われた実証主義科学の隆盛は反形而上学の流れを生み，哲学的には，論理学を軸として客観認識の方法を立て直そうとする論理実証主義の試みが現われた。これはひとことで言うと論理学を数学化する試みといってよい。論理を数学的な厳密な仕方で使えば，現実を正しく認識し，また認識を正しく伝えることができるはずだという考えである。ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』は現代哲学のこの流れを代表するものである。しかし，論理や認識の数学化という試みは，これを追いつめると必然的に「言語の謎」を生み出すことになる。現代の言語哲学はこの「言語の謎」との格闘の歴史である。さてしかし，哲学的な「言語の謎」については，すでにギリシャの哲学者ゴルギアスが，この問題の最も核心をつぎのような仕方で定式化している。ゴルギアスはつぎの三つを独自の仕方で“証明”して見せた。

1. 存在はあり得ない。（存在の謎）
2. 仮に存在があるとしても，人間はそれを認識することは決してできない。（認識の謎）
3. 仮に認識が可能だとしても，それを言語で正しく表現することは決してできない。（言語の謎）

象徴的に言えば，現代の分析哲学 (言語哲学) に現われるさまざまな難問は，ゴルギアスのこの三つのアポリアを解明すれば，すべて解明されるものといってよい。しかし，現代哲学ではこの課題は未解決のまま議論が続いている。さらに，現代言語哲学の難問，「認識と言語の一致」の問題は，近代哲学における「主観と客観の一致」の問題の変奏形にほかならず，ゴルギアスの提示した認識と言語の謎は哲学史を通して未解決の難問として続いているということになる。現代分析哲学は近代哲学の「主観 - 客観」問題を古い問題形として退け，認識には言語が必須だから言語の本質を分析すべしという立場に立った。これが「言語論的転回」といわれるが，このことでは問題はまったく解決しなかった。

ヴィトゲンシュタインは後期の『哲学的探求』で言語問題の核心点をきわめて明確な形で示した。そこにこの書物の功績があるが，それは二点ある。

第一に，言語の多義性ということをどう理解すればよいかという問題。第二は，言語ルールの曖昧性という問題，つまり，われわれは文法という形で言語ルールをもつが，実際には，その用法を厳密に規定することはできない，という問題。すなわち言語には，語の多義性と用法のルールの曖昧性がつきまとうこと。このことで言語は本質的に意味のあいまい性を克服できない。この問題を考えるところから「言語ゲーム論」が出てきた。ウィトゲンシュタインは，言語に数学のような厳密な論理性を与えることはできず，言語はいわば厳密なルールを持たない言語ゲームと考えよという像を提示した。もう一つ重要なのは，「言語ゲーム」は外部を持たないという言い方。人間世界の一切が言語ゲームの中で生成し，構成される。つまり人間的な「意味」と「価値」のすべてがこの言語ゲームの中で生じ，その根拠を外部に求めることはできない。ウィトゲンシュタインの言語ゲーム論は，言語の謎を完全に解明したわけではなかったが，現代言語学の問題の核心的な枠組みを据えたという点で決定的な役割を果たした。

2. 2. 2. 現象学

フッサール現象学の中心主題は認識論である。竹田の評価では，フッサール現象学はいわばゴルギアスのテーゼの 2 番目の「認識の謎」をほぼ解明しているが，その功績も方法も十分理解されているとはいえない。近代哲学では主観客観の一致の難問をめぐって対立が現われた。前提は，主観と客観の一致は原理的にありえないというデカルトのテーゼで，

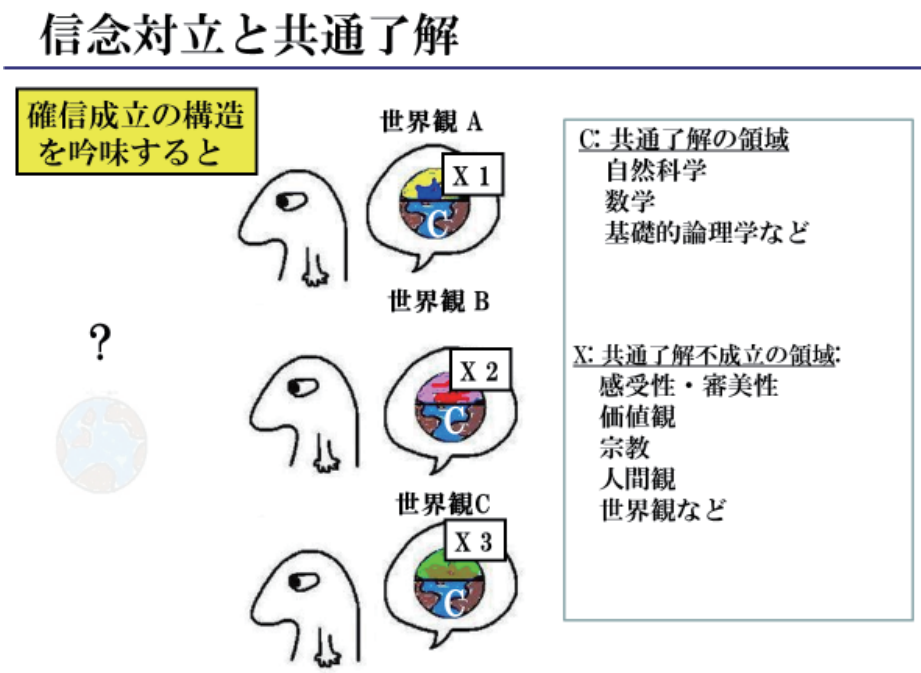

図 1

この一致がなければ，正しい認識，客観認識，真理は存在しえないことになる。一方には，人間の合理的理性の使用によって客観は認識できるという考えが現われ（スピノザの汎神論が代表），他方には，認識はどこまでも相対的でただ経験の範囲で世界を認識できるだけという考え（ヒュームの経験論）が登場して，この対立は根本的なものとなった。現代哲学における「言語の謎」はこの認識の謎の変奏形である。

フッサールは超越論的還元という方法によってこの認識問題は完全に解明されると主張した。そのアイデアはきわめて独自で，一切の認識を主観的な「確信」とみなすという視点をとる。これが「還元」の概念の核である。このことで主観と客観の一致による客観認識は不可能となる。しかし逆に，主観と客観の一致を問題としない仕方で「普遍的な認識」の可能性が説明できる。すなわち，この見方から，一切の認識は，主観的確信，共同的確信，普遍的確信の三種に区分できる。たとえば，宗教的な神の存在の確信は主観的確信ではないが，まだ「共同的な確信」である。しかし数学や自然科学の認識は，どんな人間も納得し共有される普遍的確信だといえる。ここでは，主観的な確信の集合が，普遍的な確信へと形成される条件が存在している。すなわち，フッサールは，主観 - 客観の一致は可能か，という伝統的な認識論の枠組み自体を組み替えて，普遍的な認識の可能性の条件を解明したといえる。

フッサールはこの超越論的還元の方法からさらに進んで，「本質観取」という方法を展開し，人文科学の領域で普遍的な認識を確保するための原理論として「本質学」を構想する。ここでフッサールの言う「本質」とは，人間や社会の意味や価値の問題を指している。自然科学は，厳密な客観認識を作り上げるか，自然事物に限定されていて，意味や価値の問題を扱うことができない。

2. 2. 3. 言語ゲーム

フッサールは客観認識を前提とせず，すべての認識は，それぞれの人間主観のあるいはそれぞれの共同体の共同的確信である，と考えるところから出発する。

【図 1】でいうところの C の部分は，共通了解の領域で自然科学，数学，基礎論理学の領域。ここでは民族や言語や宗教が違っても，共通了解は成立する。

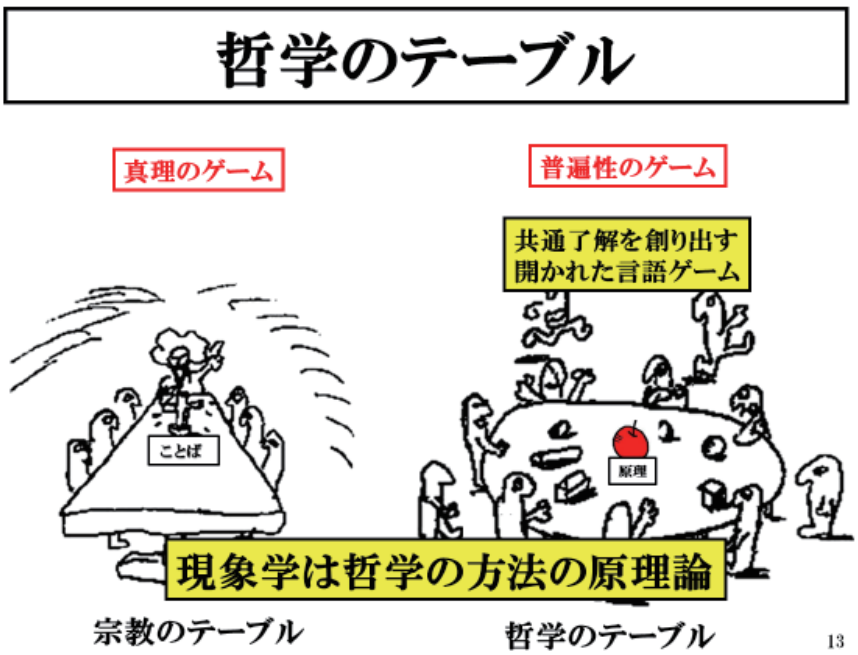

図 2

この共通了解の成立した領域を我々は客観認識と呼ぶ。X の領域は，厳密には共通了解が成立しない領域。感受性，審美性，価値観，宗教の領域。価値観に関わる領域なので，厳密な一致が成立しない。しかし，ある構造的な共通性をここから取り出すことは可能である。例えば宗教。どんな民族も必ず宗教を持っている。宗教の教説はそれぞれ多様だが，宗教というものが共同体においてもつ根本の意味や役割には大きな共通性がある。またたとえば美意識というものは，時代や文化によって大きく異なるが，しかしどんな文化も美醜という審級性を持っていることは，同じ構造で存在する。意味と価値の秩序は，自然事物のような厳密な法則はもたないが，様々な差異を示しつつ一定の共構造をもつ。図における X の領域は，世界観や価値観の領域だが，ここには必ず様々な差異が現われる。しかしこれはどちらが正しい (客観的) ということではない。この領域については，どちらかが絶対的に正しいと考えるのではなく，価値観の差異として，この違いを互いに承認しあうことができれば新しい共存の可能性が現われる。

哲学的認識論における現象学の最大の功績は，一方で絶対的な客観認識という観念を取り払うが，そのことで認識相対主義に陥ることなく，人間同士の，あるいは共同体間のあいだの共通了解，つまり「普遍的認識」の可能性の条件を解明する点にある。現象学はむしろ，認識相対主義は絶対的認識の観念の反動形成であり，両者が相補的なペアであることを示すのである。

2. 2. 4. 宗教のテーブルと哲学のテーブル

宗教のテーブルと哲学のテーブルがある。宗教では教祖がいて，これが真理だとして真理についての言葉を語る。宗教は物語によってその教義が出来ているので，この物語が正しいかあの物語が正しいか，誰も決定することはできない。しかし哲学のテーブルでは，宗教とは方法を異にする。例えば，ギリシャの哲学者タレスは，世界がどのように現われたかという宗教的「物語」を棚上げし，「万物の原理は水である」と説いた。これは自然科学の考え方の原型，すなわち最もシンプルな元素は水素原子である，という考えの出発点である。ギリシャ哲学では，哲学はまず自然哲学＝自然科学として出発したのだ。哲学のテーブルの上に，各人がさまざまな「原理」をキーワードとして置く。自分はこれを原理と考えるがどうだ，と。すると次の人間が，もっと人々に納

得を与えるようなより包括的なキーワードを置いていく。すなわち,「物語」を使わず，原理と概念で人々の納得を創り出すというのが，哲学の方法の原型といえる。

一言でいえば，宗教は真理を求め哲学は原理を追求する。原理と真理は全然違う。原理とは，普遍的な共通了解を創り出すための「キーワード」と考えてよい。まず問題を立て，どのような概念を中心としてあるいは出発点として考えれば，より多くの人間の納得を生み出すかと問う。この方法の中心概念をなすものが「原理」と呼ばれる。このことで,「原理」（キーワード）を問う方法は万人に開かれおり，誰もが吟味し合うことができるものとなる。これが哲学の方法の出発点で，自然科学はこの原理をそのまま受け継いでいる。もと哲学と科学は一つであり，自然の探求は自然哲学と呼ばれた。近代になって，自然の領域を扱うのが自然科学と呼ばれ，人間と社会の問題を扱うものがいわゆる近代哲学として進んだ（万有引力を見出したニュートンの書物のタイトルは『自然哲学の数学的基礎』である）。

宗教は「物語」によって世界を教えるので，どうしても共同性のうちの共同確信に留まり，その外に出ることができない。哲学のは宗教とは違い，普遍的な共通了解を創り出す開かれた言語ゲームだといえる。現象学は，あえていえば，哲学の思考方法を原理化した考え方である。

現象学は，自然科学の方法が自然の厳密な認識を可能にしたように，人文の領域でいかにして普遍的な認識が可能かを考える。自然科学の方法の核心は，フッサールによると「自然の数学化」である。数学はそもそも万人が共通の推論や答えを見出せるように作られた体系である。しかし人文の領域では「意味」と「価値」（すなわち諸本質）が問題になり，これは数学によってコード化することができない。数学ではない方法で，普遍認識の可能性を見出せないか。この課題からフッサールが置いたのが「本質観取」の方法である。

本質観取の方法を簡潔に言うのは困難だが，しかし原理はあの「哲学のテーブル」と同じである。まず考えるべき問題，課題があり，この問題を克服するためにどのような考え方がよいかをめぐって「言語ゲーム」を行なう。はじめに，特定の人間や共同体にとってではなく,「人々にとって」何が最もよい考えか，適切な考えかを探し出す，という前提でこのゲームは開始される。その前提で，誰でもよい考え（原理）があればテーブルの上に提示できる。そして一般の人々がその原理の「よさ」を判定する。このことで，人々が互いにさまざまな価値観を交換しつつ，相互の承認によって「原理」を“普遍的なもの”に鍛えあげてゆく。これが本質観取の方法の原型であり，同時に哲学の方法の原型でもある。人間どうし，共同体どうしの価値観は必ず違いがある。だからさまざまな対立が生じる。しかし相互承認の感度を上げながら，そこからみなが納得し合意できる新しい考え方を作り出すという方法，これが本質観取の方法の基本原則である。「真理」とは，誰かが知っているが人々には隠されているある絶対的なものだが，「原理」（＝本質）は，開かれた「言語ゲーム」を通して見出される，異なった人間間の相互了解の形である。

はじめに述べたように，いかに普遍闘争を抑制できるかは人間社会最大の課題で，人間社会はずっとこれと闘ってきた。宗教にとっても哲学にとってもこれは重要な課題となった。宗教は物語によって統一的な世界像を形成してきた。そのことで，つまり世界の聖俗や善悪の秩序についての共通了解を「物語」によって作り出すことで，共同体の安定をはかってきた。しかし，宗教は物語によってできているために共同体の枠組みを超え出ることがむずかしい。共同体の枠組みを超えるものとして現われてきたのが世界宗教だが，世界宗教も，ある時点から先へと進めず，大きな世界宗教どうしの対立が避けられないものとして残る。近代哲学は，人間世界の意味や価値の秩序についての新しい普遍的な合意形成の努力して現われた。このような観点からみて近代哲学が果たした業績を，つぎのようにまとめることができ

図 3

る。

それまで人間世界は，普遍闘争を克服する決定的な考え方をもてず，普遍闘争は絶対支配に帰結してきた。ホッブズは戦争の原理を普遍闘争として把握し，普遍闘争を抑制する原理を，強力な統治権力の創出，つまり強力なルールとペナルティのシステムの創設として定式化した。つぎにルソーがこれを受けて，強力な統治によって闘争を制御すると同時に，国家の成員の自由を確保するようなシステムを，自由の相互承認にもとづく人民権力の創設，つまり市民国家という形で提示した。これが近代市民国家の根本のアイデアとなった。このあと，カントやヘーゲルが，個人の「自由」や，相互承認にもとづく近代国家の哲学的基礎づけを行なった。具体的なことがらを例にとると，それまでヨーロッパ諸国は，カトリックとプロテスタントに分かれて激しく闘っていた。この「真理」をめぐる対立を克服する道はどこにもないように見えた。しかし哲学の考えは，宗教的信念をそれぞれが内面の信仰として納め，人間として互いに承認しあうこと，宗教の違いで差別したり，けんかしたりしない枠組み，つまり宗教を超える「市民」という概念を見出した。このことがヨーロッパの近代を，あるいは近代国家というものをはじめて可能にした。まさしくこのことが，哲学が近代社会の設計図を書いたということをよく象徴している。近代社会は，この意味ではじめて，力のゲームではなく，フェアな言語ゲームによるルールによって営まれる社会になった。

2. 3. 言語ゲームと価値審級

次に，言語ゲームと価値審級について。善悪・美醜の審級は言語ゲームの中で形成される。子どもは例外なく言語ゲームの中に産み落とされる。人間の身体は，単なる生理的身体ではなくて，「幻想的身体」，親から与えられたさまざまなルールが内面化され，感受化されて形成されてゆく身体，関係的な身体，つまり幻想的身体である。発生的言語ゲーム論は，この人間的な幻想的身体の「発生論」（形成の本質的過程についての論）を意味する。

はじめ，言語ゲームは親が一方的に使う。子どもは言葉を習い覚えることでこの言語ゲームの中に入ってくる。ここで幻想的身体の発生のプロセスを思い描くことができる。

最初の段階は初期関係の「泣き」の段階。この段階は，母（＝養育者）から子どもへの一方的な言語

ゲームがあるが，関係としては，子どもが「泣くこと」で要求を出し，養育者がそれに応答するという一方向的要求―応答関係がある。

次に「微笑み」「笑い」の関係。子どもが笑いはじめると，養育者 - 子の間に，エロス的応答関係（あやす→せがむ→あそぶ）が現われる。ここで重要なのは「関係感情の世界」が成立すること。

「関係感情」は，子どものエロスが，始発的な身体のエロス，「能う」（身体能力の展開）のエロスからさらに進んで，母親との関係的な情動性の快 - 不快にエロスの中心が転移してゆく段階のキーワードである。関係感情のエロスは，高等な動物では存在するが，人間ではより大きな役割を担う。つまりそれは身体中心的エロスから，関係的なエロスへの離陸を意味する。このはじめの要求 - 応答，「あやし，あそび応答」のプロセスを通して，親がその一切を言葉で名づけることを行い，そのことで人間の身体は，関係的なエロスを原理とする幻想的身体性へと変容してゆくからである。

つぎの重要な契機が「禁止」の登場。子どもが危険なもの汚れたものに触れようとすると，親（養育者）は，つよい態度で「禁止」を与える。そして言語ゲームは，この禁止を契機とした「よい - わるい」という世界分節を軸として進む。「禁止」の登場以後，子と親の一方的な要求 - 応答関係は，徐々に 180 度逆転してゆく。今度は親が，子どもに対して，さまざまな要求，規範やルールを与えてゆき，それに対する子どもの反応に，親は「よい - わるい」の言葉で応じる。つまり，さまざまな対象，行為，領域が，「よい - わるい」で区分されることになる。

高等な動物では，子に一定の仕方で禁止を与えるものもあるが，ここでは「安心」と「不安 - 恐れ」の分節しか現われない。しかし人間では「よい - わるい」という言葉が，子の世界の中心的分節軸となる。これがその後展開して，人間的な「よし悪し」「善悪」の審級価値の根本的基礎となる。親の主導で形成される「よい - わるい」をめぐる言語ゲームが，人間における善悪という価値審級の起源であるといってよい。

この辺りから，親（養育者）- 子どもの「言語ゲーム」は相互的なものとなり，子の身体の関係的中心化，つまり「よし悪し」と「きれい - きたない」の内面化，感受化ということが進んでゆく。

親の，禁止や規範交付に対して子どもがとる態度は大きく二つで，順守と抵抗（あるいは反抗）である。ここで，ヘーゲルのいう主と奴の戦いに近いもの，すなわち要求と応答の主権をめぐる親と子のせめぎあい，つまり自我どうしの対他関係が生じる。ここが人間的「自我」の生成の土壌である。こうして，人間は言語ゲームによって自分の人格性というものを形成し，「自我」は，自己と他者の関係の中で「関係的エロス」を中心的養分として生育してゆく。

ここまでが，人間の自我が，「善悪」「美醜」という人間に固有の独自審級を持ったものとして形成されてゆくことの始発の場面である。これを私は「発生的言語ゲーム」あるいは審級発生の言語ゲームと呼ぶ。このように，人間は，生まれた時から言語ゲームの中に産み落とされ，この中で，独自の価値審級が形成される。善悪や美醜は，人間ではこうして，内面化された関係的な身体化（幻想的身体性）ということが生じ，またここにさまざまな価値観の対立や，その競合ということが生じる。

価値審級の発生論は，個人の身体性の理論としても重要であるが，これが価値についての対立的競合的な関係の源泉でもあるために，価値審級の言語ゲームの理論は，普遍闘争の抑制を含む社会的諸問題についての関係的な基礎理論をなす。

3. 西口光一「実践研究と教育実践とイデオロギー」要旨

3. 1. イデオロギー的存在としての人間

竹田さんの『欲望論』をきっかけに，私がどんなことを考えたか，お話ししたい。私はバフチンの言語哲学の研究をしている。最近はシュッツの弟子，

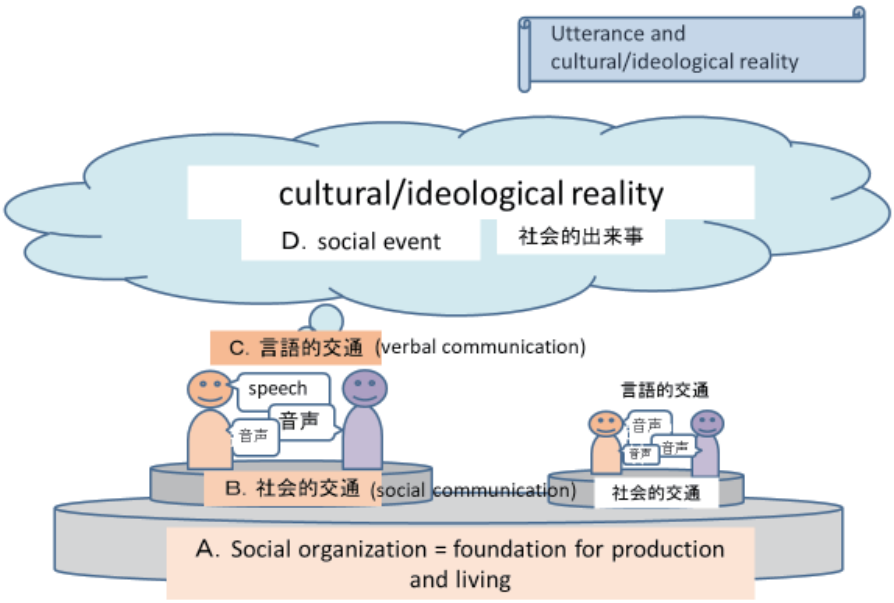

図 4. 対話（社会的交通）とイデオロギー

バーガー＆ルックマンらの知識社会学を勉強している。バフチンの言語哲学にしても，バーガー＆ルックマンの知識社会学にしても,「人間は自然的な存在ではない」という根本的な立場は同じである。端的に言うと，人間は社会文化的な存在であり，イデオロギー的な存在であるということである。イデオロギーというのは，社会主義とか資本主義とか，そういうことではなく，概念構成体つまり概念として形成されたものすべてを指す。要は，概念的なものであれば全部がイデオロギーと言える。

人間は，このイデオロギー的な構成体を長い歴史を通してひじょうに複雑，精密に，さまざまな領域で構成し，それをますます改変していっている。人間は原始の時代でも既に他の人と一緒に活動しているという意味で，既にイデオロギー的世界に入っている。このあたりを一次的イデオロギー，バフチンは日常生活のイデオロギーという言い方をしている。それに対して，バフチンは，学問・芸術・道徳・宗教，この 4 つをいつも並べて，これらを真のイデオロギーと呼ぶ。日常生活のイデオロギーと真のイデオロギーの違いは，日常生活のイデオロギーというのは，人間の物理的な活動を運営するということに関わって構成されるイデオロギーである。それに対して，真のイデオロギーは，何らかの身体を使った生産活動などをしているわけではなく，机に座ってあれこれ言って，それでそこで起こっている何かということになる。そうした対話によって構成されるのが真のイデオロギーである。哲学にしても思想にしても，真のイデオロギーという何らかの我々の生きている領域があり，それがその時代のイデオロギー的対話を構成し，またテキストという形で時代を超えて引き継がれ，修正，拡大，場合によってはそれまでのものを覆してきた。日常生活のイデオロギーと真のイデオロギーを合わせて，図 4 のように図式化できるだろう。

3. 2. イデオロギー的存在としての日本語教育者

わたしたち日本語教育者は，一人の人間としても教育者としてもイデオロギー的な存在であることは間違いない。イデオロギー的存在というのは端的に言うと，思考とか心理とか意識とか，そういうものに統御されて活動している存在である。そして，それらのイデオロギー的な思考，心理，意識，信念といったものは，ディスコースに基づいてわたしたちの中に充填され形成されてきたもので，他者と交わ

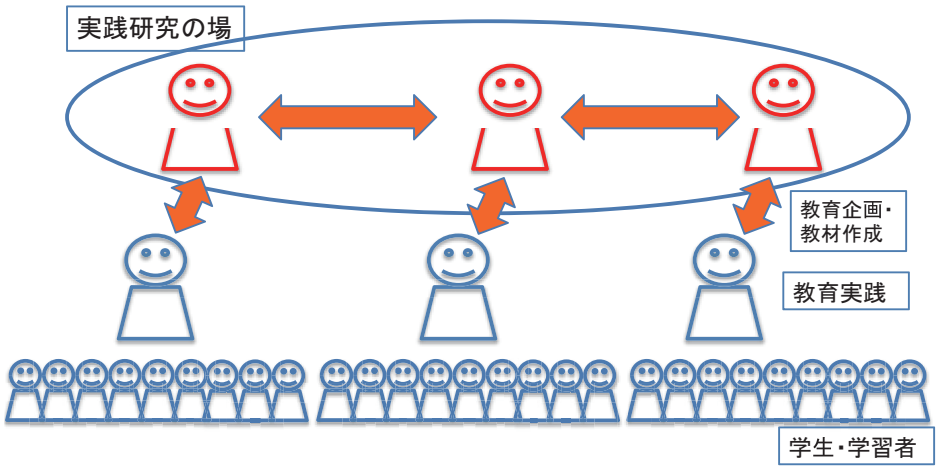

図 5. 教育企画と教材作成と具体的な教育実践 —— 一体型

る場合でも同じくディスコースを媒介にして相互行為が行われて対話というものが成立する。

日本語教育者は，哲学，思想，学問からいろいろなアイディアや観点を学ぶ。私自身はバーガー＆ルックマンの知識社会学やバフチンの言語哲学からさまざまなアイディアや観点を学んできた。もちろんいわゆる実証的研究によって検証されたこともわたしたちは学ぶ。また，直接に人との交わりを媒介にして慣習的思考というようなものも学ぶ。そういうさまざまなところからわたしたちは，自身のイデオロギーを形成し更新し豊富化していく。そして，そのようにして形成された信念，思想，観点に基づいて，教育を企画し，教材を作成し，具体的に教育を実践をしている。つまり，どのような教育企画をするかも，どのような教材作成をするかも，どのような具体的な教育実践をするかも，いずれも各教育者のイデオロギーに由来するということである。

3. 3. 実践研究と教育実践

次に，実践研究と，教育企画と教材作成と具体的な教育実践という 3 つの要素を含む広義の教育実践の関係を考えてみよう。

図 5 は，一般に行われている実践研究で想定されている実践研究と広義の教育実践の関係を示している。そこでは各教師が単独で教育企画・教材作成・具体的な教育実践をすることが想定されている。そして，そのような日本語教育者が各自の実践を持ち寄って共有し，対話をして，日本語教育者としての自身を一層向上させる場が実践研究の場となる。このモデルでは，教育実践の 3 要素が一人の教育者の中に集約されているので，これを一体型モデルと呼ぼう。

これに対し，図 6 のように分離型モデルというものが考えられる。分離型モデルでは，広義の教育実践は，教育企画･教材作成者と，コーディネータと，授業教師に分散される。つまり，これも模式的に言うと，教育企画・教材作成者は実際の教育の現場に関与せず，コーディネータと授業教師は教育企画・教材作成に関与しないと想定される。また，コーディネータは授業の計画つまり具体的にはスケジュール作成はするが実際の授業は担当しない場合もある。そして，コーディネータから教科書とスケジュールが用意されて，具体的な教育実践は授業教師に全面的に委ねられるということもしばしばある。ただし，後述するように，そのようなケースばかりではない。

実践研究の場には一体型で教育実践をしている日本語教育者も参加しているし，図 6 では明示されていないが，分離型で教育実践に関与している日本語教育者も実践研究の場に参加することができる。しかし，前者の場合と後者の場合では，実践研究と教育実践の関係が大きく異なるのである。

前者の日本語教育者は幸運である。なぜなら，実践研究での自己開発と実際の教育実践が「わたし」

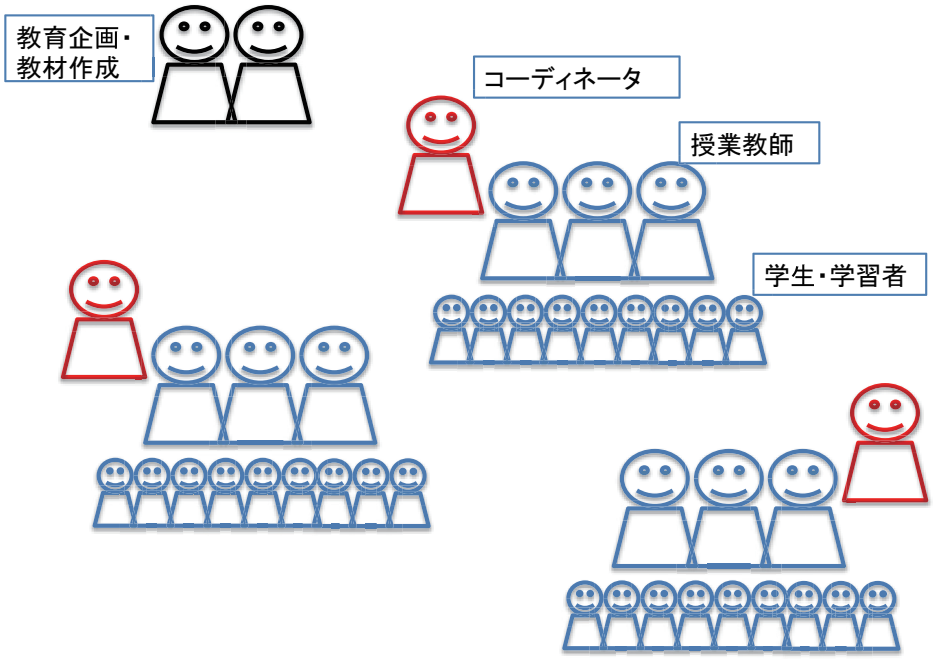

図 6. 教育企画と教材作成と具体的な教育実践 —— 分離型

において繋がっているからである。また，実践研究の場を主要な対話の場として，研究的実践者を名乗ることができるからである。音楽に譬えるなら，ソロのミュージシャンである。一方で，後者の日本語教育者の場合は，そのように幸運にはいかない。後者の場合は，言ってみれば，実践研究と教育実践の間でしばしば「引き裂かれる」。

後者の日本語教育者は，いわばバンドを編成しているミュージシャンである。教育企画・教材作成者は，言ってみればプロデューサーであろうか。各メンバーは各々で（音楽）探究や（音楽）修行のために実践研究の場に足を運びそこでの対話に参加しさまざまな刺激を得ることができる。しかし，実際の教育実践においてより重要なのは，プロデューサーを含めたメンバー間での対話である。そうした対話がないと，教育実践は結局は各授業教師にお任せの調和のないものになってしまう。その典型が従来的な初級段階の日本語教育で，適当な教科書が選定されて，スケジュールが作成されて，あとは授業教師にお任せとなる。そして，そこでは，当該の教科書に強く制約された苦し紛れの教育実践ばかりが展開される。そうした手かせ足かせの状況では，実践研究に参加して新たな視点や観点を得た授業教師は，「引き裂かれる」のである。それは，いかなる意味でも原理に基づく教育実践とは言えない。

一方で，各メンバーのさまざまな個性を受容することができる比較的緩やかな，しかし一定の原理のある教育企画をプロデューサーが立案し，メンバーたちがその企画と原理を理解し受け容れて，各自の個性や持ち味を発揮しながら実践を創造する集団になることができれば，かれらは優れた教育パフォーマンスをすることができるだろう。そこでは，原理を逸脱しない範囲で，各メンバーそれぞれの考えが尊重され，実践を構成しつつ，メンバー間の対話も継続される。

3. 4. 結び

結びとして，本発表の趣意を箇条書きにする。

(1) 日本語教育者は，本来，自身のイデオロギーに基づいて，教育企画，教材作成及び具体的な教育実践を行う。しかし，その教育実践の要素が分散されることもある。

(2) 実践研究の場での対話を通して，各参加者において，そしてその場の参加者全体として，イデオロギーが育まれる。

(3) 初級や中級前半程度の日本語教育においては，教育実践はしばしば，教科書が中心に据えられた分離型モデルとなる。そうした状況では，実践研究の場での対話を通して育まれたイデオロギーと教科書の抑制の間で，日本語教育者は「引き裂かれる」。

(4) 初級や中級前半の教育において優れた教育パフォーマンスを実行するために，わたしたちは，各日本語教育者の個性を受容することができる比較的緩やかな，しかし一定の原理のある教育企画の方略を見出さなければならない。

(5) 実践研究の場は，「ソロ」の教育者の発展だけでなく，(4) にも貢献することが期待される。

4. 細川英雄「言語文化教育は哲学の実践である」要旨

4. 1. 言語文化教育という哲学実践

私としては，竹田さんのお話のなかで，特に本質観取の方法に共鳴するものがあります。私は教室活動というのはまさに本質観取ではないか，というように最近思い始めているからです。先月熊本に行き，竹田さんのお弟子さんの苫野一徳さんをお迎えしてディスカッションをした時も同じような話になりました。本質観取というのは，私たちが探究的な態度をとろうとすると必ず出てくる問題ではないか，と思われるからです。そして教室は，探究的な態度をとるために人が集まってくる場所と考えられますから，まさに教室という場は本質観取をしている場そのものではないか，と思うしだいです。そういう意味では，言語文化教育というのは哲学の実践そのものではないか，と考えるわけです。こういうことを言っている人はあまりいないけれども，私はそういう感想を今日強く持ちました。

4. 2. 本質観取としての教室実践 —— ことばの市民への道

その理由を私なりに以下のように解釈してみます。本質観取をする場合は，問題設定がありますね。それは，教室の中で何らかのテーマを設定するということと重なります。そこでは参加者一人一人の経験のキーワードが出てくる。そこで出てくる経験のキーワードというのは，一人一人がもっている考え方とか立場とかの違いが現れてくるものです。そしてその経験のキーワードをもとにして，それを他者と比較する。そこで対話が起こり，各自のキーワードを比較検討していく。そうするとそこで，どうやって相手を説得するか，あるいは自分が納得するか，説得と納得のせめぎあいが起こります。それが対話であり議論だということになります。そのうち，そこで何らかの共通了解が現れてきます。というよりも，対話や議論によって，そうした共通了解が紡ぎだされるといってもいいと思います。こうした一連の対話は，ひとつのテーマにもとづいて起こってくるわけで，それがまさに「開かれた言語ゲーム」と竹田さんが言われたのと一致するものだろうと思われます。おそらくそれは公共性ということとも繋がっているように思われます。そういうような開かれた相互的な言語ゲームが，教育の場で行われることによって，一人一人の中に市民性が形成されていくのだろうと思います。この場合の市民性とは，ことばの活動によって社会の中の一個人であることを自覚するような，そのような個人のあり方を言います。私が言うところの「ことばの市民」という概念です。その一人一人の市民性の形成が結局は市民社会をつくって行くことに結びついていくと私は思いました。だから，今日，竹田さんがおっしゃったこと，特に本質観取と『欲望論』の後半の言語ゲームとの関係のことは，まさに教室活動そのものではないかという印象を持ったわけです。なので，言語文化教育と哲学とがどう結び付くかということは，今までほとんど話題になってこなかったけれども，実

はとっても深い関係にあって，切っても切れないものではないか，と思うようになりました。竹田さんご本人はどう教えるのか，具体的にどう実践するのかという問題には多分あまり興味はもっていらっしゃらないと思いますけれど，私はむしろ，どう実践するかということにも興味をもちつつも，でも，なぜそのような実践をするのか，ということに関心を持っています。

4. 3. 共通了解をめざして対話する言語文化教育

この問題を考えていくと，今日竹田さんがおっしゃったような，本質観取の方法とか，もちろんその前にある，自由の相互承認の考え方とかいうところに，すべて結びついていくのではないかと考えられます。共通了解をめざして対話や議論をする，つまり相互的な言語ゲームを繰り返していくというところと，言語文化教育はまったく同一であると思わざるを得ないわけです。そういう観点で考えると，今のことばの教育の世界は，まさに絶対支配的世界にあるように思います。たとえば，西口さんの指摘されるように，教育プランを立てる人，コーディネーター，その下にインストラクターという構図ですね。そうしたヒエラルキーが完璧に出来上がっています。これは，いうまでもなく絶対支配的世界でしょう。だからここからは市民性も生まれないし，公共性も生まれない。人間の本来のあり方というところに立ち返ってみると，一人一人が違う価値観や考え方をもち，自己・他者・社会の関係に関して共通了解を得ていくというその方向性をめざすことが哲学の実践なのだとすれば，ことばの教育の教室活動は根本的に変わってくるはずです。今回は竹田さんの『欲望論』を日本語教育の立場から読む，というお題をいただきましたが，むしろ竹田哲学を知ることによってもう一度，ことばの教育とは何か，ということを考えることができました。イタリアのグラムシという人がたしか晩年に，牢獄の中で「人はすべて哲学者である」というメモを残したと言われていますが，竹田さんの話を聞きながらそのことを思い出しました。今日は，ひさしぶりにパワポもなく，フリーハンドでしゃべらせていただきましたが，要するに，言語文化教育は哲学の実践であるという実感を強くした次第です。どうもありがとうございます。

5. 竹田青嗣×西口光一×細川英雄　パネルディスカッション

稲垣：先生方，どうもありがとうございました。竹田先生の言語ゲームによって人間の価値審級が形成されて，ことばによって人間が形成されるという考え方と，西口先生のイデオロギー的存在としての日本語教育者，また細川先生の言語教育自体が哲学であるという考え方は非常に重なるところがあって，それがまさに私が竹田先生をこの学会にお招きしてお二人の先生方とご対談をしていただきたいと思った理由です。それではこれよりパネルディスカッションとなります。まず，西口先生と細川先生のお話に対して竹田先生からコメントをいただいて，3 人の先生方の中でディスカッションをしていただき，その後，フロアとの質疑応答に入りたいと思います。

竹田：そうですね，細川先生が，私の場合は「どうやって教えるか」はあまり考えたことはないのでは，といわれましたが，確かにいかに教えるかについて理論としては考えたことはありません。

ただ，哲学の観点からは，教育というのものは，近代の市民社会ではとても重要な役割をもっている。すなわち市民社会は，理念上，人々の民主的感度が持続的に成熟してゆくべきものであって，その上で，教育は最も重要な，また無二の役割を果たすものです。少し回り道をして言いますと，私は 20 歳代はマルクス主義者で，30 代はポスト・モダニストでしたが（笑），その後で哲学の世界に踏み込んで，いやこれは自分の考えをもういちどやり直さないといけないと思った。その

一番大きな分かれ目は，そもそも近代社会，市民社会というもの，もっといえばヨーロッパが主導した「近代」というものを，肯定するかしないかというのが，自分の中でずっと大きなテーマとしてあった。われわれの時代は，国家権力や資本主義というものが諸悪の根源だというのがほとんど常識のようになっていて，それはすべて近代社会が生み出した矛盾であり，そこに何か根本的なオルタナティブがあるのではないかということを，ずっと考えていた。これはとくに私だけではなくて，われわれの世代の人間は多くがそういう社会の感度をもっていたと思います。いま私がもっている結論は，煎じ詰めれば，近代の市民社会にはオルタナティブはない，というものです。この点で，教育の内実と方向性をどう考えるかは，哲学的な観点からもとても大きな問題だと考えています。

それで，西口先生のお話については，西口先生としては，現在の教育の現行のシステムに関して改善の余地があるのではないか，ということで，私もその通りと思いますが，いろんな具体性を含むことなので，それについては少し後で伺わせていただきたいと思います。細川先生のお話についていえば，私が教育について考えてきたことと，非常に響きあうといいますか，我が意をえたりという感じがありました。細川先生は「市民教育」ということばを使われましたが，この言葉の重要性についての自覚がこれからますます必要であると私も思います。もちろんさまざまな国で教育のあり方についての議論があるわけですが，教育のシステムは，市民国家がたえず成熟してゆく上でのカギを握るものですから，もっと哲学的な基礎から教育のシステム全体のあり方を考える必要があると思っています。20 世紀までは「国民教育」という概念が中心だったけれど，21 世紀では「市民教育」という概念が軸にならないといけない。そういう点で，細川先生の言われたことは私にはとても共鳴できるものでした。

西口：ありがとうございます。せっかくですので，竹田先生にいくつか教えて欲しいポイントがありまして，一つは，信念対立がいろいろなコンフリクトを引き起こすというようなことでしたけれども，僕はなんか信念よりも利害の対立ではないかな，と。冷戦時代は信念対立ですし，まあそれ以前，もっと昔を辿ると宗教戦争なんていうものあったわけですけれども，現代も冷戦も終わった状況では，利害ですね，特に経済的なヘゲモニーというんですかね，それが色々なコンフリクトの原因になっているのではないかなということが一つ。それからもう一つは，価値審級の話のところで，善悪美醜は出ているんですけれども，真偽っていうのが出ていない，っていうのは何か意図があるんでしょうか，っていうことです。

竹田：社会というものが，信念対立よりむしろ利害対立を根本の軸にして動いているというのはまさしくその通りだと思います。ただ，私がそれを信念対立の問題として言うのは，近代社会では，理念上，自由の相互承認が社会の基礎をなしている。つまり利害は人それぞれに異なっているが，にもかかわらず，というかむしろその前提から，一般意志，みんなの合意を取りだして，大きなコンフリクトが生じないようにさまざまなルールを設定し，そのことで社会をフェアなゲームとして営む，というシステムになっている。王が支配していた時代と違って，さまざまな人間が異なった利害をもつことを前提として，社会の大きなルールを決めて進む必要がある。このときに新しい種類の信念対立が生じるわけです。きわめて単純化していえば，現代社会ではさまざまな社会の矛盾があるが，何がいちばん問題であるかというときに，たとえば格差の拡大ということが大きな原因であると。もちろんこれについてもいろいろな立場がありうるわけですが，まず多くの人はそう感じている。ではこの問題にどう対処するかについて，昔ならば絶対権力がすべてを決めていたけれど，近代社会では，人々の大きな合意を取り出して進ま

ないといけない。このことは市民社会における政治的，社会的決定の基本です。しかし，この政治的，社会的決定の難しさは，近代社会ではイデオロギー対立の形で現われたりする。近代社会は，利害の追求の自由だけではなく，さまざまな考え方の追求の自由ということも前提になっているので，イデオロギー対立だけではなく，人文科学の学説の領域でもさまざまな信念対立が現われてくる。そういう点で，近代社会では，さまざまな信念対立をどう克服しうるかはいっそう重要な課題になるわけです。

西口：わかりました。

竹田：さっき言いましたが，私ははじめにマルクス主義を経験して，そのあとポストモダン思想の考えにも深入りしましたが，この二つは，近代の市民社会それ自身への反対という点で共通していた。マルクス主義では，現代の市民国家は欺瞞であるといい，ポストモダン思想は，近代社会の抑圧性と非人間性を多いに喧伝しました。しかし私は，基本的に市民社会という理念を肯定する。現在ある市民社会のあり方をどう調整して，まっとうな市民社会，健全な資本主義に立て直すかが課題だと考えています。このために何が必要かを考えないといけない。しかし，これについても簡単に合意は出ませんね。その合意をどう形成するかについての哲学的な基礎はまだ作られていない。それともう一つの質問がありましたね。

西口：真偽がなぜ入っていないか。

竹田：哲学では，人間の価値の審級は「真善美」という言葉で言われます。このとき，善悪，美醜は分かりやすいけれど，真偽の概念は，少し複雑です。いわゆる真偽というとき，真理と虚偽，事実と事実でないこと，という意味ももつけれど，もう一つ，ほんとうと偽り，という意味も含まれている。哲学的な真善美を言い出したプラトンでは，真偽は，「事実」と「事実でないこと」ではなく，ほんとうと偽りという意味が中心です。私はそれをこんな感じでいいます。人間の中で「善悪」のルールはどうして形成されるか。これは誰であれ基本的にはまず親からまた世間から受けとる。そのことで人間とはこういうものだ，世の中とはこういうものだ，これこれがよいことで，これこれは悪い，というはじめの世界像を作り上げる。誰でもそうです。しかし人間はある時点で，このはじめに受けた「善悪」の分節をもういちど検証する。確かめ直して，やっぱり自分にとってはこれが「ほんとう」だ，これは違っている，という内的な倫理を形成する。単に善悪の習俗的ルールを受け容れているだけではなく，自分で自分の内的な「ほんとう」と「偽り」を形成しなおす。そういう再吟味され，内面化された倫理のありようを私は「真善美」の「真偽」の問題と考えています。

西口：はい，ありがとうございました。

稲垣：細川先生，何かうかがいたいこと，おっしゃりたいことはございますか。

細川：そうですね，竹田さんが教育に関心があるということは重々承知しているんですけども，おそらくどう教えるかとか具体的にどういう場をつくるかということには多分あまり関心がないだろうと，これはまあ前からですけれども，そのように思っていました。でも，それは一方で，哲学者としての一つのあり方だろう，というようにも思っています。

で，私の立場としては，ここで言う本質観取の場をどうやってつくるかというあたりに個人的には関心をもっていますね。それは教室活動が哲学実践であるということなんですね。でも，いわゆる言語教育，ことばの教育というものがそういうイメージから非常に遠いところにいる。それはなぜかというと，やっぱり言語教育の世界が絶対支配社会だからだと思うのです。教育全体もそういう要素をたぶんに持っていますね。ミッシェル・フーコーの言ったように，学校はすべて強制であるということですね。今，竹田さんは開かれた民主社会に対して，もはやオルタナティブがない，つまりこれ以上の新しい形はない，と言われるよう

に，真の民主社会をつくっていくためにはやっぱり対話と議論による共通了解しかないわけでしょう。それを教育の文脈で考えると，常に教師が最終的な正解をもっている，というそのあり方，そこに絶対支配社会，まあ一種の宗教と同じようなものがあると思われるんですね。どこかに正しい教義があって，それを信仰しなければいけないというそういう無言のルールがもう出来上がってしまっている。それをどうやって崩していくかというところに，教育の未来があるんじゃないかなと僕は思うんです。ことばの教育の場合は，その最右翼にいるというか，教育の絶対支配世界の最右翼がいわゆる言語教育だと認識するんです。特に日本語教育は，その最，最右翼にいるのかもしれません。それをどうひっくり返していくのかと。それはこの学会，言語文化教育研究学会の使命でもあります。

稲垣：はい。

西口：もう一つ，竹田先生に教えて欲しいんですが，まあ共通了解を作り出す，開かれた言語ゲームという，そういう表現を使っていらっしゃるんですが，共通了解っていうのが，できてしまったら，それが新たなドグマになるわけですよね。ですから，このあたり，共通了解を目指す，開かれた言語ゲームなのかなあというふうに想像したんですが，いかがでしょうか。

竹田：近代社会は，成員の意志で大きな社会的ルールを作って進んでいく社会ですね。なので，まず政治的社会的ルールの決定ということに，相互承認と共通了解という概念が必要です。ルール決定が相互承認と共通了解のプロセスを経ていなければいけない。しかし社会の状態や時代の変化に応じてルールもまた変わっていく必要がある。社会が変化を必要としているのに，ルールあるいは規定が変わらないときにはそれはドグマになる。だから，すでに存在するルールは，いつでも異議申し立てや新しい合意によって変えられる，というシステム上の保証が民主的な社会では重要になる。ルールの決定とルールの変更の原則として，相互承認と共通了解ということが前提的な概念となり，また信念対立を克服ための原理的な考えも必要になるということなんですね。

6. フロアとの質疑応答

稲垣：それではそろそろフロアに参りたいと思います。先生方のご講演，お話をうかがって，是非質問したい，議論に加わりたいという方はお願いします。

発言者①：ありがとうございます。とても勉強になりました。色々違いがある人たちが，共通了解を作っていくという点について，非常に異質な人が大勢集まった時に，バックグラウンドを共有していない時，色々悪感情や恐怖心もあり，なかなか近寄れないような環境の時に，もちろん言葉っていうのは大事な術なんですけど，果たしてことばがそこまで強い力を発揮してスムースに共通理解に至るんだろうか，と感じます。様々な所から人が集まってきた環境にある時，例を挙げるとアルゼンチンは移民の国ですが，あそこはタンゴというダンスが生まれた所です。タンゴという言葉はアフリカの言葉ですが，タンゴは音楽的にも色々なものが混ざり合っていて，それぞれの人種が，歌い手はこの系統の人，ダンスはこの系統の人，と色々な人が，言語ではないけれど一種の言語のような，共通理解を生む方法を見つけていって形になったものだと思います。あとはアメリカの例でも，人種という問題が大きくありました。かなりリベラルな思想が人種対立を越えていくような可能性を探ったと思うんです。やはり言語と思想というのは分別し，区別をしてどこか対立を生むような力も同時に働きますので，なかなかそれがうまく進んでいかなかった一方で，大衆音楽という形で，アフリカ系の人々が生んだ，ブルースでありロックンロールっていうものを自分の体に取り込むことによって，相手と繋がって行くような，

そういう運動を形成していったと思うのです。学問の世界にいると言葉の力が非常に強いので，その言葉の力を非常に大きく見がちです。言葉はもちろん強いんですが，それが絶対でないという，時に言ってる事と環境に作用している力が乖離していることも多々あって，そういうところをどのように捉えていらっしゃいますか。それが，言葉でできたみんなの共通理解らしきものと，実態とがかけ離れていたりとか，例えば，学会であれ何であれ，そこが自分の生きていく世界なので，生き物としての力関係もありますね。そういうものに対してどう自覚的であるのか。言葉がその現場の流動性に対応して，コミュニケーションを促すツールとして作用していくために，言葉にどう向き合うべきか，そんなことを意識されていましたら，ちょっとご意見を伺いたいんですけど。

西口：僕自身は，日本語教育という仕事に従事しているわけで，さっき図に書きましたように，僕がコーディネーターになって，その下で複数の先生たちと一緒にティーチィングをするというようなことをやっているわけですね。もちろんその向こうには学習者，学生もいるんですけれども，とにかく心がけているのは，それぞれの人が，自分らしい，本当の声を発することができるように，ということですね。それはまあ，先生たちにもそういうふうにしてほしいし，そうしやすいような環境を作るようにしていますし，学生たちも，なかなか直接，個々の学生と接触する機会はないんですけれども「いつでも僕の部屋に来て，話をしてもいいよ」というふうなことをしているという。要は，ガチになって教育的なことをテーマとして先生たちと議論するということもあるんですけれども，やっぱり大事なことは本当に自分自身の中の，個のテーマに関する信念をことばとして出してもらえるという，そこのところが僕自身は大事だなあというふうに思っています。

稲垣：他の先生方，よろしいでしょうか。

細川：たしかにおっしゃる通りのことは多々あるんじゃないかなと思います。ただその場合のことばというものが，ひとつの言語ゲーム，開かれた言語ゲームというように考えると，そのことばというものは，一部の切り取られた言語だけを指すわけではなく，身体性とか精神性とかいうものをすべて背負って，背負った上でのことばの活動ということだろうと思うんですね。だから，それをホリスティックに捉えながら，開かれた言語ゲームというように考えていかないとダメだと思うんです。形としての言語というようにだけで捉えようとすると，今のおっしゃるようなことが起こるのではないでしょうか。関西の内田樹さんが「コミュニケーションとは，決して傷つかないという保証の元でしか成立しない」っていうことを以前に言っていましたね。それはたぶん同じようなことかなと思います。ですから，そこでは，傷つかないことが保証される，つまり信頼の場をどうつくるかということではないかと思います。そのためには，音楽や演劇あるいはさまざまな芸術的なもののように，身体や精神と直接響き合うようなものとの融合というようなことも重要ではないかなと思いますね。

竹田：ひとことだけ。細川先生も言われましたが，言語ゲームという概念は，さまざまな社会がそれぞれの言語ゲームを行なっている，ということだけではなく，およそ人間の文化は，言語ゲームによって人間に独自の幻想性，価値性，関係性のシステムを形成しているということを含んでいます。そこから文化や宗教や価値観の大きな違いも現われるし，さまざまな対立も生じてくる。しかしそういう対立やコンフリクトももとを正せば，人間社会の言語ゲームから出てくるということが理解されたときに，むしろそういう対立を克服する可能性もまた言語ゲームにあることが分かる。人間の身体性は言語ゲームによって編まれたものだから，感受性の違いに働きかけるときに言語ゲームが役割を果たすわけです。あと，相互了解を創り出すための言語ゲームには前提条件があるという

のはその通りですね。たとえばはじめから考え方が対立していたら，つまりイデオロギーとイデオロギーの対立があって，互いに自分の考えが正しいと信じていたら，どんな場所を設定しても，ただ信念補強的な言語ゲームがあるだけで何もすすまない。考え方や価値観，感受性の違いをまず相互承認するという前提が必要だし，その上で「われわれ」ではなく「みんな」にとってのよいこと，共通に認めあえることが何かを求めあうという暗黙の前提があって，はじめて共通了解を生み出す言語ゲームが成り立つということだと思います。

発言者①：ありがとうございました。

稲垣：はい，他にお話になりたい方いらっしゃいますか。

発言者②：すいません，非常にナイーブな質問で恥ずかしいんですが，竹田先生が PowerPoint で示された，地球のマークの，あの。（編者注：本稿図 1 参照）

竹田：主観のバブルの，風船の中の地球？，

発言者②：はい。地球がこう，三つあって，地球が三つあって，下のほうが共通で，上のほうが違ってっていうところで，下のところが共通の自然科学であったりとか，ここは取り出せる。で，こちらの部分に限っては違うことを認識するということがポイントだと思うのですけれど，その構造を取り出す，そこの詳しい話をお伺いしてみたくて残念だったんですけれども。その共通の部分で，例えば，人としてとか，命，とかそういう視点で共通の了解にすることはできないんでしょうか。

竹田：C のところの，下の共通の部分ですか？

発言者②：自然科学というところに，命が大事とか，人間であるとか，

竹田：なるほど，命が大事だといった，みんなで共有できることというのは，下の部分ではなくて，上の部分ですね。

発言者②：はい，それは理解しています。で，その上で，どうして人間であるとか，人としてとか，生きているとか，命が大事とか，そういう部分は下の領域にあり得ないんでしょうか。

竹田：ここは価値観の部分ですから，命の大事さということも必ずしもすぐには一致しない。哲学的には人間どうしがなぜずっと戦争を続けていたかといえば，哲学的には不安競合という原理があって，共同体どうしで生きているので，他の共同体を信じることができない。どの共同体も「われわれ」の外側は「敵」という感度をもって生きてきた。それが人間の歴史です。みな同じ人間である，という人間のメンバーシップの感度は近代以後ようやく徐々に出てきたのだけど，これを作り上げるのに，人間は何千年もの歴史を必要としてきたわけです。それからもっといえば，みなで仲良く共存するのがいいと思っている人ももちろんいるけれど，この世の中は，結局力で動いているので善悪とかはきれいごとだ，と考えている人もたくさんいる。そういう価値観の違いを完全に一つにすることはできないんですね。哲学的にこれを追いつめると，普遍闘争原理ということに行きつきます。命がいちばん大事だというのは，生存競争から遠く離れて物質的に十分恵まれないと出てこない感度ですね。

少なくとも，近代にいたるまでは，絶対的な支配関係ではなく，互いの自由を承認しあって共存するという感度は人間にはなかった。人間は普遍闘争の状態から脱出できなかった。そこでホッブズやルソーが，人間は人間として共存できる可能性があるはずだと考えてその原理をつかもうとしたんですね。人間の世界では，いちばん根本には闘争や死ということがあり，そのために不安競合が出てくる。さまざまな価値観もその上で出てくるので，これを完全に一つにするということは難しい。

発言者②：地球が丸いということを共通理解すると同じ，同じ形で。

竹田：そのような仕方では，完全に一致した善悪の基準を作ることはできないんです。

発言者②：わかりました。

稲垣：他に，質問されたい方。

発言者③：信念対立と，本質観取というお話を聞きながら，私も今，日本語教育に携わって，そういう信念対立の現場の只中にいるので，どうしたらいいのかなって考えていました。そのことと，先ほど PowerPoint のスライド飛ばされてたところで，欲望っていうところが，どう位置付けられるのか，その信念の背景にあるものが，こうしたい，こうなりたいという欲望，という理解なのか。その辺を少し説明していただけたらなと思います。

竹田：そうですね。欲望相関性の話まではなかなか遠いんですが，欲望相関性という概念は，哲学では認識論の問題を解決するための一つの新しい考え方なんですね。そもそも近代哲学が出てきたのは，宗教対立をどうして克服するかという大きな課題があったからです。宗教は物語で教義ができているので，対立すると和解の道がほとんどない。哲学はあくまで合理性，理性でものごとを考えて，人間どうしなら了解できるはずだという道だけを探して進む方法なので，宗教上の違いがあっても，共通了解の可能性をもっているんですね。哲学はまず人間が自由を保って共存できる社会の可能性を原理として考えて進んだけれど，それでもこんどはイデオロギー対立ということが生じてきた。政治的，社会的な問題についても新しい考え方の対立がでてきた。そういう対立をどう克服するかということが，哲学では認識論の問題です。しかしヨーロッパにはキリスト教の伝統があって，どこかに「真理」，正しい考えがあるはずだという強固な前提があって，価値観の対立をなかなか克服できない。欲望論は哲学的認識論を解明するための一つの原理だといいましたが，重要なのは，なぜ人間の価値観が対立するのかという問題を欲望相関性の考えが最もよく説明するからです。欲望相関性の考えは，人間の欲望の本質を考え，そこから多様な価値観が現われるその理由をはっきりさせるので，どういう価値観が正しいのか，真理はどこにあるのかという考えではなく，価値観の相互了解の条件を考えるわけです。大事な要点は，近代社会では，多様な価値観の共存ということが大前提になりますが，そのとき，客観主義的な，あるいは真理主義的な認識論はまったくそぐわない。さまざまな価値観や利害の対立があるということを前提として社会のあり方を考えないといけない。そのときに認識論的に欲望相関性の考えが重要になる。教育の問題でいえば，市民教育の基本は，様々な違う利害や違う価値観をもった人間が，しかし，これを適切に調整しながら，社会を開かれた，相互承認にもとづくゲームとして進めるような市民の感度を育て上げることです。つまりこれまでのように「共同体の一員」としてではなく，他者を対等な人間と認めるようなメンバーシップの感覚を育てないといけない。そのためには教育に携わる人間が，市民感覚，相互承認や共通了解の感度，その理由をよく理解しているのでないといけない，まずそういう道すじなんですね。

発言者③：ありがとうございました。

稲垣：私もそのことをよく考えます。教師も自分自身の欲望というか，自分がどのように世界を見ているのかということに自覚的であることが，細川先生がおっしゃったような，支配的な，教え - 教わるという環境を突き崩すことになっていくのかなとよく感じます。

発言者④：お話を伺って，教育と「欲望」との関係について私自身考えたことがあるのですが，この解釈が適切かどうかわからないのでお尋ねいたします。価値観が違う人間同士が一緒になった時に，そこで何らかのすり合わせをしなければならないわけですが，ただ人間って，「すべき」って言われてもなかなか動かないと思うんですね。現実の問題として，教育現場だけでなく，実際の社会生活の中でも，価値観の対立をどうやって調整するかで困ることはよくあるのですが，そういう調整というのはなかなか辛い作業だと思うんです。辛いことをしろと言われてもなかなか人間は動かない。で，そういう時に，我々教育に関わる人間が

考えるべきこととしては，辛いんだけれども，それを乗り越えることがうれしい，そうすることによって自分が喜びを感じられるっていうふうな，そういうその経験を持たせてあげるにはどうしたらいいかを考えることなんじゃないか。「もたせてあげる」っていうのはなんか変な言い方ですけれども，教師自身が，そういう調整という行為に実際に喜びを感じることができる，ということは大切なことでしょうし，また教育の現場にいる人々にも，大変なことを乗り越えることに快 - 不快の快の気持ちをもってもらえるような試みが必要なんじゃないか。そのためにはどうすればいいかということを，教育に携わる者としてはこれから考えていかないといけないんじゃないか，というようなことをいま考えました。そういう意味で，教育と，竹田先生のおっしゃる欲望論とが接点を持ちうるんじゃないかと考えたんですが，こういう捉え方で的外れではないかについて，お尋ねできればと思います。

竹田：教育する人間がいかに生徒や学生をよい方向に導くかは，具体的にはなかなかいろんな考えがあるように思います。ただ哲学の立場からは，教育が何を保証すべきかは大きく二つあるように思います。市民教育の根本は，まず，どういう出自や階層であれ，できるだけ対等でフェアな仕方で社会の競争の出発点に立てるようにするというのが第一の目標ですね。極端にいうと，階層を再生産しない，最も下層から出ても，努力と工夫で社会的に成功できる可能性がある，ということ，つまり社会的なゲームの流動性を確保するということ，そのための力，ノウハウをフェアな形で習得させるということが，まず市民教育の第一の存在理由。つぎに，市民社会では，自由な承認競争がどんどん進むので，ヨーロッパではキリスト教，日本では習俗的な道徳が果たしていたような，超越的な倫理の基準が存在しない。どのような生き方をするかを，自分で選び，自分で決定しないといけない。近代社会の教育がいわゆる「人文教養」を与えるのは，そのためです。文学や思想やほかの文化的なことがらを身につけながら人はそれぞれの仕方で，自分の生き方の指針を作っていく。これが第二のポイントです。それからもう一つ，近代社会は，固定的な役割社会ではなくて，かなりきびしい競争ゲームの社会です。ここでは，自分を適切に了解し，適切に表現する力がなければ，他者とよい関係を作るのは難しい。すごく単純化していえば，自我の防衛や攻撃性が高いとメンタルな問題が生じてくる。どんな人間も，近代社会の中では伝統的な社会がもたなかったそういう新しい課題をもつので，教育はこの課題をサポートするという役割を負っている。競争の力の獲得，内的な倫理のための人文教養，そして関係的な自己了解という三つのことが教育の大きな軸になるように思います。

私は大学で教えているので，いま，それまでの教育課程でどんなことがとくに重要な課題になるかはさほどよく知りませんが，自分の中では，あくまで学生がそういう課題をクリアしていくのを支えたり手助けしたりする，というような感じで，教師としての自分の役割を考えています。欲望論のからみでいいますと，いわれたように，人間を，「すべきである」つまり当為によって導くのは，規律的な教育の方向になる。人間は，「したい」ということと「しないといけない」がつねにせめぎあっているし，また「したい」という欲望についてもつねに複数性がある。だから，かくかくのように考えなさい，という当為的な方向ではなく，それぞれの人間が，自分の欲望のあり方をよく認識し，自己了解して，自分なりの生き方を見つけていけるように助ける，というのが，私の中では教育ということの原則になっているという感じです。

発言者④：ありがとうございました。

発言者⑤：ご講演ありがとうございました。私も長いこと言語教育に携わっていく中で迷いが生じた時，現象学を心の支えにして教壇に立ってきまし

た。この十数年で，多言語多文化の意識が言語教育の中でも浸透してきていて，すごく良くなってきたと思います。その一方で，多言語多文化が掲げられていながら，実際にはそうでないという状況も見聞きしています。理念と現実の間で矛盾を感じる時，自分では現象学的な本質観取という考え方を思い出しながら現場に向かっています。そういう現実に立ち向かう時のヒントを教えていただければ，また励みにできるかなと思います。

竹田：この話は正直いいますと，私には難しくて，多言語あるいは多文化の教育，というものがどういう形で行なわれていて，その中でどういうことが中心の論点にあっているか，ほとんど知りません。ただ，英語教育のことを言うと，私も英語で教える必要があってなかなか苦労していますが，英語教育が絶対に必要だというようにはもちろん思わない。しかし，大きく考えると，これからとくに発展途上の国の人々は，自国から出て先進国に行ったり，他の国の人間と交流したりする必要がどんどん大きくなる。そのかぎりで，好むと好まざるにかかわらず英語教育は今後世界規模でますます重要性をもつことになると思います。その場合，親が属している言語圏や文化圏との重ね合わせということが当然でてくる。つまりバイリンガルやトランスカルチュラルの問題を教育の中でどう位置づけるかということが出てくるのだと思います。

自分のことを少しだけ言いますと，私は在日二世の韓国人ですが，日本生まれ日本育ちで残念ながら韓国語はできません。そうして在日の二世，三世，四世世代では，必ず世代間の価値観や感度の違いが，ある場合には対立として現われてくる。親の世代と子の世代の生き方の上での衝突や対立ですね。親の方は，自分の民族性や文化との一体性を守りたいし，子の世代は新しい文化に入っていこうとする。そのときに必ずコンフリクトが生じて双方ともに悩むということが起こる。このことは，世界中で起こっている普遍的な現象です。こういう場合もまた，市民的な共存の考えが原則とならないといけない。重要なのはまず選択肢があるということ，多様な選択肢があって各人が自分でそれを選べるのでないといけない。何が何でも「英語」が大事だというようなことではなく，どんな場所でも市民感覚，つまりメンバーシップの感覚が成熟してゆくこと，誰でもが相互承認の上で開かれたゲームの成員としてフェアな扱いを受ける，そのために何にプライオリティをおくべきか，という形で考えることが原則ではないかと，私としては思います。

発言者⑤：ありがとうございました。

稲垣：すみません。時間になってしまいました。今日は本当に竹田先生はじめ，細川先生，西口先生，ありがとうございました。そして議論に参加して下さった皆さま，ご来場下さった皆さま，本当にどうもありがとうございました。（拍手）

文献

竹田青嗣（2017a）.『欲望論 —— 第 1 巻「意味」の原理論』講談社.

竹田青嗣（2017b）.『欲望論 —— 第 2 巻「価値」の原理論』講談社.